

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月30日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530814

研究課題名（和文）「協同的な学びづくり」の指導力を定着させる授業診断指標の開発

研究課題名（英文）The Development of Coaching Ability Criterion for Cooperative Learning

研究代表者

原田 信之 (HARADA NOBUYUKI)

岐阜大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：20345771

研究成果の概要（和文）：「協同的な学びづくり」においては、グループ活動を通し、開かれた個として他者と切磋琢磨しつつ協同の精神を培い、学習の効果を相乗的に高めることのできる指導力が問われる。この授業者の指導力の水準を的確に評価するため、可視化することが容易でなく、他者との関係下で構成的に発揮される相互作用的な社会コンピテンシーに着目し、技法改善に活用できる授業診断指標を開発した。

研究成果の概要（英文）：To ensure the quality of cooperative learning the teacher's coaching ability will be challenged to produce a multiplier effect with children as far as cultivating their open mind for intensive active learning and to develop their collaborative spirits via cooperative learning activities. For the assessment of teacher's coaching abilities are developed diagnosis criteria identifying lesson and learning improvement with special emphasis on interactive social competency. This element of competency can hardly be visualized but in a certain way be demonstrated by a constructive relationship within the learning cooperation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：協同学習（協働学習）、グループ学習、授業評価、コンピテンシー、教師教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、家族規模の縮小やコミュニティの委靡を危惧する先進国において、協同学習論

(Cooperative Learning)の研究が、学術的にも実践的にも広がりを見せている。これは、本来、グループ活動の形式的導入を乗り越え、互恵的相互協力関係の価値の共有(協同の精神の実現)を目指す実践論である。この実践論では、「個」が個性的であるが故に集団の発展が約束されるとし、個性化と集団化は相対立する概念としてとらえず、あくまでも「開かれた個」として「共存・協力」の意識・態度を育成する指導技法として蓄積されてきた。こうした知の社会構成主義的な学習法は、より高次の学力育成に有効であることも、欧米における多角的実証研究により指摘されてきた。

(2) グループ学習に対する教師の指導の質を問う評価規準は、授業評価の項目全体のうちごく一部にはみられるが、「協同的な学びづくり」を明確に意識し、その規準として開発されたものではない。ましてや授業診断指標を定め、教師の指導力定着のための体系をもつ評価シートの開発は、これまでのところほぼ皆無である。協同の精神がはぐくまれると同時に、知性を刺激するアクティブ・ラーニングへと学習状況を導いていく教師の指導力の質を問う評価方法の開発が求められていた。

2. 研究の目的

(1) グループ活動を通し、開かれた個として他者と切磋琢磨しつつ協同の精神を培い、学習の効果を相乗的に高めることのできる「協同的な学びづくり」の指導力を定着させるための授業診断指標を開発する。OECDのDeSeCoプロジェクトが定義したキー・コンピテンシー(Key Competencies)では、「異質な集団で交流する」ことが能力枠として設定されたが、本研究の目的の背後には、この能力を育成する教師の指導力の質向上を促進するための指標開発という意図を有している。この指導力定着を求めるニーズの高さに関し、公共性の高い能力指標や教育課程の基準を対象に、学力規定における社会コンピテンシー(soziale Kompetenz)の位置づけに焦点を当てて明らかにする。

(2) 「協同的な学びづくり」を推進する学校において、同僚をはじめとする授業観察者が、当該教師の指導力を見取る視点を明らかにし、観察による授業評価のためのシートを開発する。このシートは、自己の指導の在り方を省察し、かつ授業研究会等での協議に活用されることが期待できるものである。

3. 研究の方法

(1) 協同学習の先行研究や授業観察評価の事例(「効果的なグループ活動プロジェクト」、

「グループ課題やグループへの対処法を観察するプロジェクト」、「効果的な話し合い活動」等)をレビューするとともに、先行実践の評価規準を収集し、抽出・類型化する。これらについては、授業実践者に聞き取り調査を行うなどして、グループ活動を効果的なものにする教師の手続きや技法に絞り、同僚による授業観察を通じた診断的評価に有効な視点を明らかにし定めることとする。

(2) 従来のグループ学習を発展させた欧米の協同学習論の先行研究において開発された評価規準に基づき、パフォーマンス評価を通し有効性の検証を行う。パフォーマンス課題とは、一般に「リアルな文脈において、知識やスキルを統合して使いこなすことを求めるような課題」(西岡)のことを指す。児童生徒がこのパフォーマンス課題に取り組む学習過程に協同学習を組み入れ、社会コンピテンシーを発揮することを求める評価規準を設定する。こうした指導過程を構想し実践検証を行い、教師の指導力を判定する上で授業観察の視点としての汎用性を確かめることとする。

4. 研究成果

(1) 「協同的な学びづくり」において指導の対象とする社会コンピテンシーについては、OECDのDeSeCoプロジェクトの定義はもとより、欧州やドイツにおける資格認定の枠組という、国や国を超えた次元でこの能力枠を重視する傾向にあり、近未来型学力形成に不可欠な要素であることの根拠を明らかにした。次に、2008年1月の中央教育審議会答申では、生きる力はキー・コンピテンシーという考え方を先取りしていた、と説明した。他方、わが国では社会コンピテンシーを育成する指導法は、十分に根づいているとは言いがたく、この側面から日本の教育課程上の課題を鋭く指摘した。これら主に欧州の教育改革の進捗状況から日本の現況を鑑み、本研究の意義を裏づけることができた。

(2) 「協同的な学びづくり」は、他者と切磋琢磨して協同の精神を培うとともに、教科等学習において思考力や判断力をも相乗的に高めるという二面的な能力展開を図る指導性を有している。グループの成員相互の協力・促進関係の構築を意図する協同学習において、構成員の「参加」の内実こそがグループ活動の質を規定することになる。この「参加状況」を鋭く問ひかけ、授業者が視野に入れるべき定型の手続きとして指導方法を可視化し、出現する複雑な集団事態に対し、当該授業者が選択した手続きの意味や根拠を検討するための「授業観察評価シート」とし

て、その条件を満たしうる指標や規準項目を特定しようとした。

授業診断指標の作成に当たり、ドイツにおいて広く実践展開が図られている協同学習論に着目し、観察診断（モニタリング）による授業評価に活用できるものとするを視野に入れて開発を行った。主なものとして、①グループが効果的に機能しているかどうかを観察する視点を定めた「KT観察視点」、②自律的参加度を診断するため、社会コンピテンシーの観察視点を定めた「グリーンのコンピテンシー・チェックリスト」、③グループ成員が相互に積極的にかかわろうとする参加状況に絞る視点を定めた「ブリューニング/ザウムの参加状況の判定」、④成員個人[自己]・グループ[他者]・学習課題[対象]への取組という3視点を交錯させた「クリッペルトの参加状況判定の3視点」が挙げられる。

①「KT観察視点」では、争点を明確化し議論を深めるツールとしてグループ形態を用いる手立てに着目し、成員相互の話し合い状況を観察するのに有効な視点を示している。掴みどころがなく質の判定が容易でないグループの話し合いの内実を浮き彫りにし、改善の手がかりをえることを意図し、(a)空間の雰囲気や座席配置などの枠組条件、(b)教師の役割、(c)グループ成員として果たす個人の役割、(d)グループ内の活動性、という4つの枠組を設け、話し合い活動がアクティブ・ラーニングとなっていたかどうかの点において質を判定しようとする授業観察評価である。

②「グリーンのコンピテンシー・チェックリスト」は、グループ活動を効果的にする要因として、学習者の社会コンピテンシーの習得度に着目したものである。ここで社会コンピテンシーはグループ内交流を促進する振舞いとして捉えられ、「編成コンピテンシー」、「機能コンピテンシー」、「定式化コンピテンシー」、「触媒コンピテンシー」の4視点により、生徒の習熟レベルに応じた指導座標を判定する視角がえられる。社会コンピテンシーを習得し、その能力を生かすツールとしてグループ形態が説明される。

③「ブリューニング/ザウムの参加状況の判定」については、本来、グループでの話し合いや作業に関し、児童生徒の自己評価及び相互評価用の規準として開発されたものである。これを指導と評価の一体化の観点から、教師が指導し定着を図るべき事項として再構成したものである。

④「クリッペルトの参加状況判定の3視点」では、「私の視点（私は…）」、「私たちの視点（私たちは…）」、「学習課題の視点」を三位一体の活動と捉え、対話的コミュニケーションによる協同的な学習として、成員の参加状況の質を判断する視点を提供してくれる。グ

ループ活動中の教師の介入行為についても、「侵襲的な教師の介入」と「対応的な教師の介入」に区別し、一連の因果関係により状況を分析することの重要性を指摘した。

グループの構成員が協同学習への満足度を自己評価するOPPA（協同学習満足度調査）により、子どもの認識変容に影響を及ぼす教師の指導行動と協同学習に対する子どもの認識カテゴリーとの親和性を確かめ、その結果に基づきどのような教師の働きかけが有効かについても要因を明らかにし考察した。協同的なグループ探究を通し、共生や連帯をめざし新たな公共性を構築していくという社会構築主義的な意味において、相互協力関係の内実に迫る自律した「参加」行動への指導の質を問いかけ、この質に着目した指導のあり方にも迫った。

(3) 社会コンピテンシーは、可視化することが容易でなく、他者との関係下で構成的に発揮される相互作用的な能力である。こうした見えにくく評価しにくい学力要素は、他国の教育課程の基準（学習指導要領）にはどのように位置づけられているのだろうか。社会コンピテンシーが教育課程の基準において指導事項として明確に位置づけられている現状を指摘した上で、その指導法開発の課題を明らかにすることは、本研究の意義を確認するのに重要であった。これについて、教育スタンダード改革による質向上を実現しようとするドイツを対象に、近年改訂した州の教育課程の基準を分析し、基盤となる学力観をコンピテンシー・モデル（図1）として特定することができた。

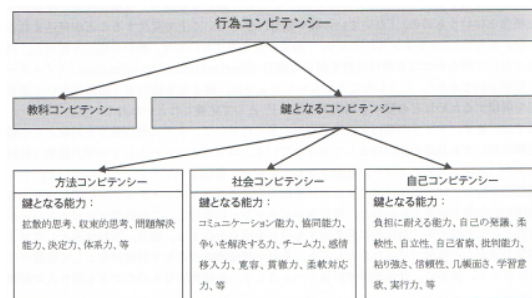


図1 ストイデルの行為コンピテンシー構造図

文化高権主義をモットーとする国において、州による多少の差異は存在するにせよ、「専門（教科）コンピテンシー」、「方法コンピテンシー」、「社会コンピテンシー」、「自己コンピテンシー」を基本とする学力観が構築されていた。「社会コンピテンシー」は、教科の枠を超えて育成するコンピテンシーとして、全教科及び全学校生活における共通の目標として位置づけられていることを明ら

かにすることができた。わが国においても、教師力の向上を求める際、協同の学びづくりがこれに寄与することが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

- ①原田信之、協同学習に関する授業観察評価指標の開発、岐阜大学教育学部研究報告 人文科学、査読無、第61巻第2号、pp.231-239、2013(リポジトリ：<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/zinbun/pdf/610219.pdf>)
- ②原田信之、グループ学習による社会コンピテンシーの育成と評価、岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究、査読無、第15巻、pp.171-178、2013(リポジトリ：<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/jissen/pdf/1515.pdf>)
- ③Harada, Nobuyuki: Beitrag des offenen Lebenskundeunterrichts in der Leistungsgesellschaft Japans. In: www.widerstreitsachunterricht.de/, 査読有, Nr. 18, S. 1-8, 2012(リポジトリ：<http://www2.hu-berlin.de/wsuebene1/superworte/international/harada.pdf>)
- ④原田信之、グループ活動の質を問う授業観察評価、岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究、査読無、第14巻第1号、pp.71-77、2012(リポジトリ：<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/jissen/pdf/140107.pdf>)
- ⑤原田信之、ドイツで育成しようとしている学力とは ～理数教育プログラム(SINIS-T)の作題例を通して～、pp.100-109、中部教育学会紀要、査読無、第11号、中部教育学会、2011
- ⑥原田信之、協同学習のための授業観察評価の視点、岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究、査読無、第13巻、pp.155-162、2011(リポジトリ：<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/jissen/pdf/1313.pdf>)
- ⑦原田信之、ドイツの統合教科「事実教授」のカリキュラムとコンピテンシー ～ハンブルク州2010年版基礎学校学習指導要領の検討～、岐阜大学教育学部研究報告 人文科学、査読無、第59巻第1号、pp.269-282、2010(リポジトリ：<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/zinbun/pdf/590125.pdf>)

〔学会発表〕(計4件)

- ①原田信之、課題研究「グローバル時代における『生きる力』の探究～ヨーロッパ(ドイツ)研究の視野から～」、日本学校教育学会第27回大会(武蔵大学)、2012年7月29日

- ②原田信之、「ドイツで育成しようとしている学力とは」、中部地区教育公開シンポジウム「基礎学力の探求とその保証」、日本教育学会・中部教育学会共催(名古屋大学)、2010年6月25日

〔図書〕(計3件)

- ①原田信之、「総合的な学習の時間」を総点検する—研究者の立場から求められる総点検の内容と方法—、pp.1599の257-1600(加除式出版：8頁分)、「総合的な学習」実践研究会(編集)：総合的な学習の実践事例と解説、第一法規、2011
- ②原田信之、総合的な学習の時間における指導のポイント、pp.136-139、財団法人学校教育研究所(編)、新しい教育課程における言語活動の充実、学校図書、2010
- ③原田信之、総合的な学習の時間：理論、pp.191-194、佐藤真(編著)、各教科等での「見通し・振り返り」学習活動の充実、教育開発研究所、2010

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geocities.jp/nrmkg400/cl.html>



図2 「協同的な学びづくり」の指導力を診断・評価する視点

上記ホームページでは、2007-2009年度の科学研究費補助金により作成したリーフレット『学びの共同体』づくりのための授業技法化モデル、及び授業技法化プログラム等をまとめた手引き『学級を「学びの共同体(ラーニング・コミュニティ)」にするための協同学習』とともに、2010-2012年度の研究成果として、(1)グループが効果的に機能しているかどうかを観察する視点を定めた「KT観察視点」、(2)自律的参加度を診断する社会コンピテンシーの観察視点を定めた「グリーンコンピテンシー・チェックリスト」、(3)グループ成員が相互に積極的にかわろうとする参加状況を観察する視点を定

めた「ブリーニング／ザウムの参加状況の判定」、(4)成員個人・グループ・対象（学習課題）への取組という3視点を交錯させた「クリッペルトの参加状況判定の3視点」を公開している。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 信之 (HARADA NOBUYUKI)
岐阜大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：20345771

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし